

なかなかお目にかかれなくなってしまった和ろうそく。その魅力は、ゆらゆら揺れる光のシルエットではないだろうか。材料となるのは、和紙と真綿、はぜの実である。すべてが植物性なので、すすが少なく、溶けたロウはほとんど横に流れずに燃焼するので長もちする。しんの中心が空洞になっていて、そのため炎が上下に揺れ動いたりするので、その表情の美しさから「生きた炎」というのだそうだ。風に強く、消えにくく、油煙が出にくいので使いやすい。

製法は和紙を巻いてしんを作り、よくかくはんしてロウを手で塗り重ねて太くしていく「手がけ」が伝統的だ。しかし今では、この方法で製造している人がすっかり少なくなってしまったそうだ。うすの中で練られたロウの中にしんを漬け込み、すぐに引き出して手につけながら、くし全体を回転させて固まったらまた漬け込む。この作業を繰り返しながら形づくっていく。これによって年輪ができる。しんを中心に溶けるので、周りにこぼれることがないのだ。仕上げを白く整えて、美しい形ができ上がる。

こうして手間と時間をかけて作られるので、普通の物と比べると、和ろうそくの炎には何ともいえない情緒があるのだ。夏の夜、家族でくつろぐリビングルームに、または友人と語らう場所に、しなやかに優しい光のシルエットを置いてみてはいかがだろうか。